

その存在の大切さに気付いていますか？

アリスタ ライフサイエンス株式会社 光畑雅宏

「送粉者」という言葉をご存知だろうか。粉とは花粉のことである。花粉を送る生物。受粉昆虫や花粉媒介者という方がなじみ深いだろうか。近年、果樹、果菜類などの農業生産はもちろん、生態系維持の中でも重要な役割を果たす“受粉”に関わる生物、昆虫を表す際には「送粉〇〇」を使うことで統一されつつある。そして言葉の統一以上に、重要視されつつあるのが、これら送粉者、送粉昆虫の保全である。言わずもがな、この動きは世界中で大きくなっており、その中でも送粉者の代表ともいえるミツバチを含むハナバチの保全については、「Save the Bee」という標語で公的あるいは民間企業等でも多くの活動が行われている。この活動については、任期中のオバマ前大統領も公文書を発出したほどである。

2000年代に入り、飼養されているミツバチに大きな事件が起きた。欧米を中心に報告されたCCD(ミツバチ群崩壊症候群)と呼ばれる症例である。ミツバチが巣箱から忽然と姿を消す、これまでに報告のない異様な行動は、今もなお原因が特定されていない。一因としてネオニコチノイド系農薬の影響も疑われ、欧州における使用制限、ひいては我が国の農薬取締法改正における、新たなミツバチ(含野生ハナバチ)への影響評価の導入につながっている。欧米では、飼養されているミツバチのみならず、マルハナバチなどの野生ハナバチの絶滅、生息域・密度の減少が相次いでいることも、社会的な問題として危惧されている。IPBES(生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学-政策プラットフォーム)などの報告

では、世界の主要作物種の4分の3以上、全作物生産量の35%は送粉者に依存しており、市場価値換算で2,350~5,770億米ドル相当の寄与、何百万人もの雇用と収入を提供し、人が摂取する微量栄養素、ビタミン類、ミネラル類の大部分を占めるとしている。つまり、ハナバチなどの送粉者がいなくなれば、我々人類は生活を維持することができないことを意味している。我が国でも近年、生産現場では、高齢化による人工授粉の労力の減少も含め、果樹の着果率の低下は放置できない問題になりつつある。加えて、本来ハナバチなどによって受粉されるはずの果樹の防除暦には、開花の前後にハナバチへの影響の強い合成農薬が組み込まれていることも少なくない。が、これらの問題を解決すべき専門の研究機関が我が国にはないという事実も見逃せない。

日本ではBeeという単語は「ハチ」と訳される。しかし、本来Beeとは「ハナバチ」を指す単語であり、スズメバチ、アシナガバチあるいは天敵昆虫としても利用されている寄生バチなどにはWasp(ワスプ)という単語が用意されている。つまりWaspを日本語に訳すなら「カリバチ」ということとなる。欧米では一般の人もこの単語を使い分ける。我が国では「ハチ」と聞くと多くの人が刺す、危険というイメージを持つ。よって「Save the Bee」などとは、とんでもないキャッチフレーズに聞こえるかもしれない。しかし、そろそろ我々日本人もBeeの存在の重要性を認識し、彼らの利用、保全に関する意識を高める時が来たのではないかと思う。

(みつはた まさひろ)